

57 時満ちて杏に小さき月生りぬ長き日暮れを千々に熟れゆく

峰尾碧 (昭和二三〇)

幻想的な一首に果樹の時間が込められている。時が来て、杏の木は小さな実を宿す。実の一つ一つは、月の嬰兒^{みどり}。長くなつた初夏の日暮れに、それぞれ土と太陽から養分を得て、熟れてゆく。子供のころ、蚊帳の中で独文学者の祖父が語るグリム童話を聴き、長じて文学と音楽を友とする峰尾。現実のようで現実でないような世界は、歌詞のない「ヴァカリーズ」に似て想像を掻き立てる。『森林画廊』(平成三〇〇年)から。
(加古)

58 百人の生まれ出づれば百通り生き方のあり逝き方がある

長嶺元久 (昭和二六〇)

第二歌集『百通り』(平成二九年)より。宮崎で内科の開業医として勤務する作者は、患者との関わりの中で、人生、生死、家族、身体を詠む。長い医師生活の中で多くの生死と向き合つてきつた作者であればこそ的人生観が詠まれる。人生とはこうである、とか、生きるとはなどとは歌わない。ただ、人間を見つめ、歌にする。百人には百通りの最期の迎え方があるとは、見てきた者にしか詠めない歌であろう。

(御手洗)

59 落ち武者のわれかもしれず遠望の城が小さな鳥影となる

中西由起子 (昭和二七〇)

戦いに敗れるも生き延び、再起を図ろうとする武士の姿にその身を喻える。辿り着きたい城は未だに遠い。遙かに小さく見える城は鳥の影のように思える。第一歌集『沙羅の視点』、第二歌集『迦楼羅の嘴』、毎月の「心の花」を読み継いできた読者は、この歌に作者の道程を重ねて読む。東日本大震災など未曾有の災害を経験した平成期を生きた私たちは、生き延び、どこかに辿り着けるだろうか。第三歌集『夏燕』(令和元年)より。

(服部)

60 ほしいままで大きくなりし冬瓜の身をひきしめてへた一つあり

松橋雅実 (昭和二七〇)

「心の花」平成三年一月号掲載。何の変哲もなさそうな冬瓜が、ユーモラスな個性を持つてそこにある。伸びやかな上句から一転、へたに焦点を絞つて存在を浮き彫りにした。空や水、鳥、虫、草花、身巡りの自然に宿るささやかな不思議を松橋は見つめ続ける。くももの張る糸は見えねどえごのきの枝より枝へひかりは走る(同三〇〇年十二月)へ降りやまぬ雨に二つの水たまりどちらからともなく繋がりぬ(令和元年九月)

(梅原)